【俺】「…ん？…ここは一体どこだ…？…俺は確か…」
俺が目を覚ますと、周囲はいかにもファンタジーな感じの平原だった。
変な夢でも見ているのだろうか？　俺は自分の状況を思い出す。
そうだ、確か道路をぼーっと歩いていた所、トラックにはねられて、
救急車のサイレンの音を聞きながら意識が消えて行ったような…。
【俺】「…ここはあれか？　ここはあの世ってヤツか？」
俺は死んでしまったのだろうか。俺は改めて状況を確認する。
俺の体の感覚はハッキリしている。手には何か握っている。
何だこれは？　剣？　なんで剣なんか握っているんだろう？

【俺】「…は、剣ー？　そ、それと俺のこの恰好は……ー？」
俺は恐る恐る自分の体を確認してみる。
男の体の時には存在しなかったおっぱいと、ポニーテールにされた長い赤毛。
そして男の時にはあったイチモツの感覚が綺麗さっぱり無くなっており、
そのスタイルの良い肉体は、露出のビキニアーマーに包まれている。
【俺】「…まさかこれ、俺の大好きなアリスの…」
信じられない事だが、どう見ても俺の肉体と服装は、俺の大好きな
アリスである、幻夢戦記レダの主人公、朝霧陽子になっている。
俺はもしかして、今流行りの異世界転生って事になってしまったのだろうか？

【俺】「…とは言え原作通りであれば、森の中で犬が話しかけてきて、ターバン巻いたヤツの部下と戦う事になるんだけど…」
若い頃、ビデオテープが擦り切れるくらい見た作品だ。
俺は明らかにその作品の主人公なのに、その作品と同じ展開になってない。
これは一体どういう事なのだろう？
肉体だけ陽子ちゃんになった別世界なのだろうか？
【俺】「…とにかく、色々と確かめてみないとな…」
俺はごくりと生唾を飲む。幸いな事に、ここは荒野のど真ん中。
周囲には人気が全くない。そして今の俺は、憧れの陽子ちゃんと
まったく同じ肉体になっているのだ。となればやる事は一つしか無かった。

【俺】「…はぁっ…はぁっ…」
俺が本当に陽子ちゃんと同じ肉体になっているのかどうか確認しなければ。
俺は少し興奮しながら、慣れない手つきでビキニアーマーのブラを外し、
ビキニアーマーのパンツを脱ぎ捨てて行った。
元々心もとなかった装備から、大事な部分を隠すパーツが無くなり、
胸と股間が露わになる。
【俺】「…こんな屋外で裸になってしまった…」
陽子ちゃんのような美少女が、こんな何も無い平原で、
その形の良いオッパイと、白いお尻を大っぴらに晒している。
こんな所を誰かに見られたら…俺はめちゃくちゃに興奮していた。

【俺】「はぁっ…はぁっ…♥」
俺はその場でかがみこんで両足を開いた。
股間には無毛の割れ目がはっきりと見えている。
【俺】「こ、これが女の子の…陽子ちゃんの…」
童貞だった俺が生まれて初めて見た生の女性器。
この綺麗な割れ目が俺の体なのか…。俺はますます興奮した。

【俺】「…見た目は陽子ちゃんだけど、今は俺の肉体なんだし、俺が自由にしても文句無いよな…」
俺はどうやってこの体を楽しもうか考えた。
【俺】「んっ…その前に、ちょっと冷えたかな…」
割れ目を意識した所で、ビキニを脱いだ影響なのか、体が冷えて尿意がしている事に気が付き、俺は下腹部に力を込めた。

《ぷしゃぁぁぁぁぁぁ…》
力を込めてすぐ、割れ目を押し開くように、
勢いよく黄金色の液体が噴き出してきた。
【俺】「俺、美少女なのに…こんな恰好で放尿してる…」
いつもやっている行為なのに、肉体が違うだけでこうも違うのか。
割れ目を伝う液体の感覚に、俺はますます興奮を高めていく。

【俺】「よーし、すっきりした所で…いよいよ…」
こんな開けた場所でやるのは少々恥ずかしい気もするが、もう我慢の限界だ。
俺は胸と割れ目に指を伸ばそうとするが…。
【俺】「…え？　なんでだ？　体が動かない…？」
さっきまで普通に動いていた手が急に動かなくなってしまった。
どういう事だ？　俺は何度も胸と割れ目を触ろうとしてみたが、結果は同じだった。

【俺】「…くそっ…一体どうなってるんだ…」
色々試してみたが、体の自由が利かなくなったわけでは無かった。
胸や割れ目を愛撫しようとすると、とたんに腕が動かなくなってしまうのだ。
なんでこんな事に…。これじゃオナニーが出来ない。
憧れの陽子ちゃんの、JKのエロい肉体に転生できても、
これではヘビの生殺し状態じゃないか。
【俺】「…まずは冷静になれ…これが転生物であれば、
定番のステータス画面が見れるはずだ…よし…」
俺が念じると、空中に俺の、この肉体のステータスが表示された。
身長、体重、戦闘力、クラス…定番のステータスの最後に、驚愕の一言が書かれていた。

【俺】「…はぁ？ー？　自慰行為禁止の呪い！？　なんだこれは！？」
俺はその一文を見て、平原のど真ん中で大声を上げてしまった。
何故なら、この肉体には、オナニーできない呪いがかけられていたからだ。
道理でオナニーしようとすると体が硬直するわけだ。
この体呪いを一体誰がかけたのか、それは全くわからないが、
迷惑極まりない呪いである事は間違いない。
【俺】「くそっ…これじゃ宝の持ち腐れだ…ぬか喜びだよ…」
俺はがっかりしながら、ステータス画面を閉じた。
こんな美少女の肉体に触れられないなんて、なんて拷問だ。
そんな事を考えていた時だった。　突然、岩陰から何かが飛び出して来たのだ。

【魔物】「ぐるぅぅぅぅぅぅぅっっっ!!!」
【俺】「うわっ!? こ、こいつは一体っ……!?」
岩陰から飛び出して
魔物が襲い掛かって来たのだ。
四足歩行の毛の生えた肉体に、
大きな翼が生えている。
いわゆるキメラ系の魔物だ。
【俺】「くそっ! 剣なんて使った事も無いのに……!」
とは言え、黙ってやられるわけにはいかない。
俺は無我夢中で剣を振り回し、魔物を攻撃していく。
予想通り俺の肉体は高性能で、魔物をどんどん追い詰めていった。

【魔物】「ぐぎゃぁぁぁぁっっっ…」
【俺】「はぁっ…はぁっ…。な、なんとか勝ったか…」
思っていたよりも
この肉体が高性能だったため、
何とか魔物に勝つ事はできた。
とは言え、ロクに剣を使えない俺の攻撃では、
魔物の分厚い毛皮を切り裂く事は出来ず、
ほぼタコ殴りにして勝ったという、正直微妙な勝ち方だ。
【俺】「…もう大丈夫かな…いきなり起き上がってこないよな…？」
魔物はその場で倒れ、苦しそうにうめき声をあげていた。
俺は魔物にとどめを刺すべく、ひっくり返っている魔物に近寄った。

俺が近寄ると、魔物は顔を上げ、俺の全身をなめるように凝視した。
その股間部分には、隆々と勃起したペニスが見えている。

【俺】「こ、これペニスか…？
ま、まさこいつ…俺を…！？」

魔物は俺を体を見て、俺の声を聞いて、
そのペニスをビクンと脈打たせた。
間違いない。こいつは俺を犯そうとして襲い掛かってきたのだ。
もし負けていたら、こんな魔物に犯されていたかもしれないのだ。
そう考えた所で、俺は先ほどまでオナニーできず悶々としていた事を思い出す。
オナニーは呪いで禁止されているが、犯される事は禁止されていないよな…。
その事に気が付いた俺は、勃起する魔物のペニスを見て、生唾を飲み込んだ。

魔物は俺の体を眺めながら、無様に腹を出して服従のポーズを取っている。
もう俺に勝負を挑む気は無いようだ。
【俺】「…もう抵抗する気は無いみたいだな。
おい化け物。
俺を犯したかったんだろ？
やらせてやろうか？」
【魔物】「ぐるぅぅぅっっっ…」
魔物は俺の言葉が分かったのか、それとも俺の発情が雰囲気で伝わったのか、
まるで返事をするように、そのペニスをビクンと大きく脈打たせた。
陽子ちゃんのような美少女JKの初体験が、こんな魔物なのかと思うとゾクゾクする。
俺は両足を大きく開き、魔物に向けてオマンコを見せつけた。

【俺】「ほ、ほら…見えるか？」
大きく両足を開くと、ぴっちり閉じていた割れ目が、音を立てて糸を引いて左右に開く感覚が伝わってくる。
【魔物】「ハッ…ハッ…」
魔物の興奮する息遣いが聞こえて来る。この体になって初めての相手が魔物で良いのだろうかとは思ったが、人間の男に抱かれる事を想像し、そのおぞましさに震えてしまったので、こっちのほうがいいのかもしれない。
【俺】「俺が…レダの戦士たる朝霧陽子が…モンスター相手に股を開くなんて…」
俺は魔物に犯されるという興奮で割れ目をじっとりと湿らせる。魔物はその匂いで理性が飛んだのか、遠慮なく俺にのしかかって来た。

【魔物】「ウゴアアアアッッッ！」
《ずぷっ…ぶちぶちぶちっ…！》
【俺】「ひぎっ！？　あっ…！」
突如股間に走った激痛。
その直後、自分の肉体の芯に、
何かが突き刺さる感触が伝わる。
この痛み、この異物感。
これが犯されるという事なのか。
予想していたよりもはるかに激しい、
肉体的苦痛と精神的衝撃だった。
俺は最初の威勢を完全に失い、
そのショックに固まってしまった。
【俺】「あっ…ぐっ…」
【魔物】「ニギャアアッ…」
そんな俺の弱さを、野生の魔物が
見逃すはずもない。
魔物はべろりと舌なめずりをした後、
俺の膣をむさぼり始めた。